

愛知大学国際中国学研究センター (ICCS)

国際シンポジウム

「中国をめぐる開発と和諧社会」

開催趣旨

開発と和諧

中国の「開発」政策の骨子は、江沢民時代の1999年に始まった12省区を対象とする「西部大開発」の中に見ることができる。「西部大開発」は1)東西地域の著しい開発格差の是正、2)少数民族の社会的・政治的安定化、3)環境保護、4)WTO加盟による農業・農民等への影響の緩和、などを目的とするものであった。その具体的手段として、西部地域における道路・鉄道・内陸空港建設、都市化の促進、西気東輸事業、西電東送事業、南水北調事業などのインフラ建設、退耕還林・還草事業、水利・節水事業など環境保護対策、その他産業構造調整・科学技術・教育の発展などの取組みが行われてきた。社会的課題をハード面のインフラ整備を通じて達成しようとする取組みであるといえる。

このような開発モデルは中国の他の地域の経済開発にも当てはまるものであるが、開発による国家建設路線に加え、和諧社会建設という考え方が登場した。それは2006年10月の第16次6中全会「中共中央社会主義和諧社会建設に関する重大問題決定」である。和諧社会建設は胡錦濤政権の中心となる政治的課題である。

「重大問題決定」では、中国は全体的にはすでに和諧的であるが、なお和諧に少なからぬ影響を及ぼす矛盾や問題、たとえば都市と農村や地域間における経済社会発展の不均衡、人口と資源環境問題の拡大、政治腐敗などが課題として残されているとされた。そのうえで社会の和諧は中国社会主義の本質的属性であり、国家を強化し、民族振興を図り、人民の幸福を保証する手段として重要であるとされた。そしてその達成目標を2020年におき、以下の原則を挙げた。1) 人民の利益を優先、2) 科学の発展を堅持、3) 改革開放を堅持、4) 民主政治を堅持、5) 安定した改革的発展、6) 共産党指導の下で社会建設を行うというものである。和諧社会を建設しようとする背景には、人間中心社会の建設、中国社会の国際スタンダード化と国際競争の激化、イデオロギー主導型国家建設方式の終焉などがあると思われる。

方法的視点

開発と和諧を総体的に考察するには、多面的な方法による考察結果を総合する観点が重要である。多面的な方法とは、まず中国の西部大開発に典型的な開発と和諧社会建設を相関的にとらえ、その一体性や分離性（あるいは矛盾）を意識しつつ、これを研究課題として総合的な考察を加え、その特殊性と普遍性を把握する、というものである。

開発については市場と政府一体的な中国的成長モデルの検証抜きには論じられない。また、和諧の考察には、国内的調和と国際的調和という二重の考察の視点がありうる。この場合、アジアNIEsの開発・社会安定化モデルとの比較や相対化、同地域における農村開発モデル等との比較を視点にもつことも重要である。

これらの関係について、現代中国学方法の一環として本研究センターが構築してきた共同態度論にもとづく問題発見・解決型の地域研究法すなわち平和のための地域研究法にもとづく他、多様かつ自由なあらゆる研究方法を歓迎したい。たとえば今回のシンポジウムのセッションである経済、政治、環境、文化の各研究領域と関連する開発経済学、開発政治学、開発環境学、開発人類学等の諸学問の方法も参考になるはずである。

本シンポジウムでは、開発の主眼が経済開発におかれてきたことをも踏まえ、まず経済セッションの議論を先行させ、政治、環境、文化というセッション（研究領域）から総体的な考察を加え、和諧社会の実現可能性と課題等について学術的討論を展開したい。

シンポジウムの目標

これらの方法的視点のもとで、本シンポジウムを通じ、我々は以下のような目標を共有したい。中国がこれまで進めてきた開発の特殊性と普遍性、和諧の位置づけと背景・効果・矛盾、和諧社会の実現可能性と国際的影響について考察することである。キーワードは開発と人間である。そしてその調和が現代中国の枠組みにおいて、果たして可能かどうか、あるいはどのようにすれば可能なのか。議論はこの点に集約されよう。

愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）

所長 高橋五郎

2008年7月